燕と王子

有島武郎

燕(つばめ)という鳥は所をさだめず飛びまわる鳥で、暖かい所を見つけておひっこしをいたします。今は日本が暖かいからおもてに出てごらんなさい。羽根がむらさきのような黒でお腹(なか)が白で、のどの所に赤い首巻(くびま)きをしておとう様のおめしになる燕尾服(えんびふく)の後部(うしろ)みたような、尾のある雀(すずめ)よりよほど大きな鳥が目まぐるしいほど活発に飛び回っています。このお話はその燕のお話です。

燕のたくさん住んでいるのはエジプトのナイルという世界中でいちばん大きな川の岸です——おかあ様に地図を見せておもらいなさい——そこはしじゅう暖か

でよいのですけれども、燕も時々はあきるとみえて群れを作ってひっこしをします。ある時その群れの一つがヨーロッパに出かけて、ドイツという国を流れているライン川のほとりまで参りました。この川はたいそうきれいな川で西岸には古いお城(しろ)があったり葡萄(ぶどう)の畑があったりして、川ぞいにはおりしも夏ですから葦(あし)が青々とすずしくしげっていました。

燕はおもしろくってたまりません。まるでみなで鬼ごっこをするようにかけちがったりすりぬけたり葦の間を水に近く日がな三界遊びくらしましたが、その中一つの燕はおいしげった葦原の中の一本のやさしい形

の葦とたいへんなかがよくって羽根がつかれると、そのなよなよとした茎先にとまってうれしそうにブランコをしたり、葦とお話をしたりして日を過ごしていました。

そのうちに長い夏もやがて末になって、葡萄の果も紫水晶のようになり、落ちて地にくさったのが、あまいかおりを風に送るようになりますと、村のむすめたちがたくさん出て来てかごにそれを摘み集めます。摘み集めながらうたう歌がおもしろいので、燕たちもうたいつれながら葡萄摘みの袖の下だの頭巾の上だのを飛びかけって遊びました。しかしやがて葡萄の収穫

も済みますと、もう冬ごもりのしたくです。朝ごとに河面は霧が濃くなってうす寒くさえ思われる時節となりましたので、気の早い一人の燕がもう帰ろうと言いだすと、他のもそうだと言うのでそろそろ南に向かって旅立ちを始めました。

ただやさしい形の葦となかのよくなった燕は帰ろうとはいたしません。朋輩がさそってもいさめても、まだ帰らないのだとだだをこねてとうとうひとりぽっちになってしまいました。そうなるとたよりにするものは形のいい一本の葦ばかりであります。ある時その燕は二人っきりでお話をしようと葦の所に行って穂の出

た茎先にとまりますと、かわいそうに枯れかけていた葦はぽっきり折れて穂先が垂れてしまいました。燕はおどろいていたわりながら、

「葦さん、ぼくは大変な事をしたねえ、いたいだろう」

と申しますと葦は悲しそうに、

「それはすこしはいたうございます」

と答えます。燕は葦がかわいそうですからなぐさめて、

「だっていいや、ぼくは葦さんといっしょに冬までいるから」

すると葦が風の助けで首をふりながら、

「それはいけません、あなたはまだ霜（しも）というやつを見ないんですか。それはおそろしいしらがの爺（じい）で、あなたのようなやさしいきれいな鳥は手もなく取って殺します。早く暖かい国に帰ってください、それでないと私はなお悲しい思いをしますから。私は今年（ことし）はこのままで黄色く枯れてしまいますけれども、来年あなたの来る時分にはまたわかくなってきれいになってあなたとお友だちになりましょう。あなたが今年死ぬと来年は私一人っきりでさびしゅうございますから」

　ともっともな事を親切に言ってくれたので、燕もとうとう納得（なっとく）して残りおしさはやまやまですけれども見

かえり見かえり南を向いて心細いひとり旅をする事になりました。

　秋の空は高く晴れて西からふく風がひやひやと膚身(はだみ)にこたえます。今日(きょう)はある百姓(ひゃくしょう)の軒下(のきした)、明日(あす)は木陰(こかげ)にくち果てた水車の上というようにどこという事もなく宿を定めて南へ南へとかけりましたけれども、容易に暖かい所には出ず、気候は一日一日と寒くなって、大すきな葦の言った事がいまさらに身にしみました。葦と別れてから幾日(いくにち)めでしたろう。ある寒い夕方野こえ山こえようやく一つの古い町にたどり着いて、さてどこを一夜のやどりとしたものかと考えましたが思わ

しい所もありませんので、日はくれるしかたがないから夕日を受けて金色に光った高い王子の立像の肩先（かたさき）に羽を休める事にしました。

王子の像は石だたみのしかれた往来の四つかどに立っています。さわやかにもたげた頭からは黄金の髪（かみ）が肩まで垂（た）れて左の手を帯刀（おはかせ）のつかに置いて屹（きっ）としたすがたで町を見下しています。たいへんやさしい王子であったのが、まだ年のわかいうちに病気でなくなられたので、王様と皇后がたいそう悲しまれて青銅（からかね）の上に金の延べ板をかぶせてその立像を造り記念のために町の目ぬきの所にそれをお立てになったのでした。

燕はこのわかいりりしい王子の肩(かた)に羽をすくめてうす寒い一夜を過ごし、翌日(あくるひ)町中をつつむ霧(きり)がやや晴れて朝日がうらうらと東に登ろうとするころ旅立ちの用意をしていますと、どこかで「燕、燕」と自分をよぶ声がします。はてなと思って見回しましたがだれも近くにいる様子はないから羽をのばそうとしますと、また同じように「燕、燕」とよぶものがあります。燕は不思議でたまりません。ふと王子のお顔をあおいで見ますと王子はやさしいにこやかな笑(え)みを浮(う)かべてオパールというとうとい石のひとみで燕をながめておいでになりました。燕はふと身をすりよせて、

「今私をおよびになったのはあなたでございますか」
と聞いてみますと王子はうなずかれて、
「いかにも私だ。実はおまえにすこしたのみたい事があるのでよんだのだが、それをかなえてくれるだろうか」
とおっしゃいます。燕はまだこんなりっぱなかたからまのあたりお声をかけられた事がないのでほくほく喜びながら、
「それはお安い御用です。なんでもいたしますからごえんりょなくおおせつけてくださいまし」と申し上げました。

王子はしばらく考えておられましたがやがて決心のおももちで、

「それではきのどくだが一つたのもう、あすこを見ろ」

と町の西の方をさしながら、

「あすこにきたない一軒立（いっけんだ）ちの家があって、たった一つの窓（まど）がこっちを向いて開いている。あの窓の中をよく見てごらん。一人の年老（と）った寡婦（かふ）がせっせと針仕事（はりしごと）をしているだろう、あの人はたよりのない身で毎日ほねをおって賃仕事をしているのだがたのむ人が少いので時々は御飯も食べないでいるのがここから見える。私はそれがかわいそうでならないから何かやって助け

てやろうと思うけれども、第一私はここに立ったっきり歩く事ができない。おまえどうぞ私のからだの中から金をはぎとってそれをくわえて行って知れないようにあの窓から投げこんでくれまいか」

とこういうたのみでした。燕は王子のありがたいお志に感じ入りはしましたが、このりっぱな王子から金をはぎ取る事はいかにも進みません。いろいろと躊躇（ちゅうちょ）しています。王子はしきりとおせきになります。しかたなく胸（むね）のあたりの一枚（まい）をめくり起こしてそれを首尾（しゅび）よく寡婦（かふ）の窓から投げこみました。寡婦は仕事に身を入れているのでそれには気がつかず、やがて御飯

時にしたくをしようと立ち上がった時、ぴかぴか光る金の延べ板を見つけ出した時の喜びはどんなでしたろう、神様のおめぐみをありがたくおしいただいてその晩は身になる御飯をいたしたのみでなく、長くとどこおっていたお寺のお布施(ふせ)も済ます事ができまして、涙(なみだ)を流して喜んだのであります。燕も何かたいへんよい事をしたように思っていそいそと王子のお肩にもどって来て今日(きょう)の始末をちくいち言上(ごんじょう)におよびました。

次の朝燕は、今日こそはしたわしいナイル川に一日も早く帰ろうと思って羽毛(うもう)をつくろって羽ばたきをい

たしますとまた王子がおよびになります。昨日の事があったので燕は王子をこの上もないよいかたとしたっておりましたから、さっそく御返事をしますと王子のおっしゃるには、

「今日はあの東の方にある道のつきあたりに白い馬が荷車を引いて行く、あすこをごらん。そこに二人の小さな乞食の子が寒むそうに立っているだろう。ああ、二人はもとは家の家来の子で、おとうさんもおかあさんもたいへんよいかたであったが、友だちの讒言で扶持にはなれて、二、三年病気をすると二人とも死んでしまったのだ、それであとに残された二人の小児は

あんな乞食になってだれもかまう人がないけれども、もしここに金の延べ金があったら二人はそれを御殿（ごてん）に持って行くともとのとおり御家来にしてくださる約束（やくそく）がある。おまえきのどくだけれども私のからだからなるべく大きな金をはがしてそれを持って行ってくれまいか」

燕はこの二人の乞食を見ますときのどくでたまらなくなりましたから、自分の事はわすれてしまって王子の肩のあたりからできるだけ大きな金の板をはがして重そうにくわえて飛び出しました。二人の乞食は手をつなぎあって今日はどうして食おうと困（こう）じ果てていま

す。燕は快活に二人のまわりを二、三度なぐさめるように飛びまわって、やがて二人の前に金の板を落としますと、二人はびっくりしてそれを拾い上げてしばらくながめていましたが、兄なる少年は思い出したようにそれを取上げて、これさえあれば御殿の勘当（かんどう）も許されるからと喜んで妹と手をひきつれて御殿の方に走って行くのを、しっかり見届けた上で、燕はいい事をしたと思って王子の肩に飛び帰って来て一部始終の物語をしてあげますと、王子もたいそうお喜びになってひとかたならず燕の心の親切なのをおほめになりました。

次の日も王子は燕の旅立ちをきのどくだがとお引き

留めになっておっしゃるには、
「今日は北の方に行ってもらいたい。あの烏（からす）の風見（かざみ）のある屋根の高い家の中に一人の画家がいるはずだ。その人はたいそう腕（うで）のある人だけれどもだんだんに目が悪くなって、早く療治（りょうじ）をしないとめくらになって画家を廃（はい）さねばならなくなるから、どうか金を送って医者に行けるようにしてやりたい。おまえ今日も一つほねをおってくれまいか」

そこで燕はまた自分の事はわすれてしまって、今度は王子の背（せ）のあたりから金をめくってその方に飛んで行きましたが、画家は室内（なか）には火がなくてうす寒いの

で窓をしめ切って仕事をしていました。金の投げ入れようがありません。しかたなしに風見の鳥に相談しますと、画家は燕が大すきで燕の顔さえ見ると何もかもわすれてしまって、それぱかり見ているからおまえも目につくように窓の回りを飛び回ったらよかろうと教えてくれました。そこで燕は得たりとできるだけしなやかな飛びぶりをしてその窓の前を二、三べんあちらこちらに飛びますと、画家はやにわに面（おもて）をあげて、

「この寒いのに燕が来た」

と言うや否や窓を開いて首をつき出しながら燕の飛び方に見ほれています。燕は得たりかしこしとすきを

窺って例の金の板を部屋の中に投げこんでしまいました。画家の喜びは何にたとえましょう。天の助けがあるから自分は眼病をなおした上で無類の名画をかいて見せると勇み立って医師の所にかけつけて行きました。

王子も燕もはるかにこれを見て、今日も一ついい事をしたと清い心をもって夜のねむりにつきました。

そうこうするうちに気候はだんだんと寒くなってきました。青銅の王子の肩ではなかなかしのぎがたいほどになりました。しかし王子は次の日も次の日も今まで長い間見て知っている貧しい正直な人や苦しんで

いるえらい人やに自分のからだの金を送りますので、燕はなかなか南に帰るひまがありません。日中は秋とは申しながらさすがに日がぽかぽかとうららかで黄金色の光が赤いかわらや黄になった木の葉を照らしてあたたかなものですから、燕は王子のおおせのままにあちこちと飛び回って御用をたしていました。そのうちに王子のからだの金はだんだんにすくなくなってかわいそうにこの間までまばゆいほどに美しかったおすがたが見る影（かげ）もないものになってしまいました。ある日の夕方王子は静かに燕をかえり見て、

「燕、おまえは親切ものでよくこの寒いのもいとわず

働いてくれたが、私にはもう人にやるものがなくなってしまってこんなみにくいからだになったからさぞおまえも私といっしょにいるのがいやになったろう。もうお帰り、寒くなったし、ナイル川には美しい夏がおまえを待っているから。この町はもうやがて冬になるとさびしいし、おまえのようなしなやかなきれいな鳥はいたたまれまい。それにしてもおまえのようなよい友だちと別れるのは悲しい」とおっしゃいました。燕はこれを聞いてなんとも言えないここちになりまして、いっそ王子の肩で寒さにこごえて死んでしまおうかとも思いながらしおしおとして御返事もしないでいます

と、だれか二人王子の像の下にある露台(ろだい)に腰(こし)かけてひそひそ話をしているものがあります。

　王子も燕も気がついて見ますとそこには一人のわかい武士と見目(みめ)美しいおとめとが腰(こし)をかけていました。二人はもとよりお話を聞くものがあろうとは思いませんので、しきりとたがいに心のありたけを打ち明かしていました。やがて武士が申しますのには、

「二人は早く結婚(けっこん)したいのだけれどもたいせつなものがないのでできないのは残念だ。それは私の家では結婚する時にきっと先祖から伝えてきた名玉を結婚の指輪に入れなければできない事になっています、ところ

がだれかがそれをぬすんでしまいましたからどうしても結婚の式をあげることはできません」

おとめはもとよりこの武士がわかいけれども勇気があって強くってたびたびの戦いで功名てがらをしたのをしたってどうかその奥さんになりたいと思っていたのですから、涙をはらはらと流しながら嘆息をして、なんのことばの出しようもありません。しまいには二人手を取りあって泣いていました。

燕は世の中にはあわれな話もあるものだと思いながらふと王子をあおいで見ますと、王子の目からも涙がしきりと流れていました。燕はおどろいてちかぢかと

すりよりながら「どうなさいました」と申しますと王子は、

「きのどくな二人だ。かのわかい武士の言う名玉というのは今は私のひとみになっている、二つのオパールの事であるが、王が私の立像を造られようとなされた時、私のひとみに使うほどりっぱな玉がどこにもなかったので、たいそう心をいためておいでなさると悪いへつらいずきな家来が、それはおやすい御用でございますと言ってあのわかい武士の父上をおとずれてよもやまの話のまぎれにそっとあの大事な玉をぬすんでしまったのだ。私はもう目が見えなくなってもいいか

らどうか私の目からひとみをぬき出してあの二人にやってくれ」

　とおっしゃりながらなお涙をはらはらと流されました。およそ世の中でめくらほどきのどくなものはありません。毎日きれいに照らす日の目も、毎晩美しくかがやく月の光も、青いわか葉も紅（あか）い紅葉（もみじ）も、水の色も空のいろどりも、みんな見えなくなってしまうのです。試みに目をふさいで一日だけがまんができますか、できますまい。それを年が年じゅう死ぬまでしていなければならないのだから、ほんとうに思いやるのもあわれなほどでしょう。

王子はありったけの身のまわりをあわれな人におやりなすったのみか、今はまた何よりもたいせつな目までつぶそうとなさるのですもの。燕はほとほとなんとお返事をしていいのかわからないでうつぶいたままでこれもしくしく泣きだしました。

王子はやがて涙をはらって、

「ああこれは私が弱かった。泣くほど自分のものをおしんでそれを人にほどこしたとてなんの役にたつものぞ。心から喜んでほどこしをしてこそ神様のお心にもかなうのだ。昔キリストというおかたは人間のためには十字架の上で身を殺してさえ喜んでいらっしたの

ではないか。もう私は泣かぬ。さあ早くこの玉を取ってあのわかい武士にやってくれ、さ、早く」

とおせきになります。燕はなおも心を定めかねて思いわずらっていますうちに、わかい武士とおとめとは立ち上がって悲しそうに下を向きながらとぼとぼとお城(しろ)の方に帰って行きます。もう日がとっぷりとくれて、巣(す)に帰る鳥が飛び連れてかあかあと夕焼けのした空のあなたに見えています。王子はそれをごらんになるとおしかりになるばかり、燕をせいて早くひとみをぬけとおっしゃいます。燕はひくにひかれぬ立場になって、

「それではしかたがございません、御免(ごめん)こうむります」

と申しますと、観念して王子の目からひとみをぬいてしまいました。おくれてはなるまいとその二つをくちばしにくわえるが早いか、力をこめて羽ばたきしながら二人のあとを追いかけました。王子はもとのとおり町を見下ろした形で立っていられますが、もうなんにも見えるのではありません。

燕がものの四、五町も走って行って二人の前にオパールを落としますとまずおとめがそれに目をつけて取り上げました。わかい武士は一目見るとおどろいてそれを受け取ってしばらくは無言で見つめていましたが、

「これだ、これだ、この玉だ。ああ私はもう結婚ができる。結婚をして人一倍の忠義ができる。神様のおめぐみ、ありがたいかたじけない。この玉をみつけた上は明日（あす）にでも御婚礼（ごこんれい）をしましょう」

と喜びがこみ上げて二人とも身をふるわせて神にお礼を申します。

これを見た燕はどんなけっこうなものをもらったよりもうれしく思って、心も軽く羽根も軽く王子のもとに立ちもどってお肩の上にちょんとすわり、

「ごらんなさい王子様。あの二人の喜びはどうです。おどらないばかりじゃありませんか。ごらんなさい泣

いているのだかわらっているのだかわかりません。ごらんなさいあのわかい武士が玉をおしいただいているでしょう」

と息もつかずに申しますと、王子は下を向いたままで、

「燕や私はもう目が見えないのだよ」

とおっしゃいました。

さて次の日に二人の御婚礼がありますので、町中の人はこの勇ましいわかい武士とやさしく美しいおとめとをことほごうと思って朝から往来をうずめて何もかもはなやかな事でありました。家々の窓からは花輪や

国旗やリボンやが風にひるがえって愉快（ゆかい）な音楽の声で町中がどよめきわたります。燕はちょこなんと王子の肩にすわって、今馬車が来たとか今小児が万歳をやっているとか、美しい着物の坊様（ぼうさま）が見えたとか、背（せい）の高い武士が歩いて来るとか、詩人がお祝いの詩を声ほがらかに読み上げているとか、むすめの群れがおどりながら現われたとか、およそ町に起こった事を一つ一つ手に取るように王子にお話をしてあげました。王子はだまったままで下を向いて聞いていらっしゃいます。やがて花よめ花むこが騎馬（きば）でお寺に乗りつけてたいそうさかんな式がありました。その花むこの雄々（おお）しかっ

た事、花よめの美しかった事は燕の早口でも申しつくせませんかった。

天気のよい秋びよりは日がくれると急に寒くなるものです。さすがににぎやかだった御婚礼が済みますと、町はまたもとのとおりに静かになって夜がしだいにふけてきました。燕は目をきょろきょろさせながら羽根を幾度（いくど）か組み合わせ直して頸（くび）をちぢこめてみましたが、なかなかこらえきれない寒さで寝（ね）つかれません。まんじりともしないで東の空がぼうっとうすむらさきになったころ見ますと屋根の上には一面に白いきらきらしたものがしいてあります。

燕はおどろいてその由を王子に申しますと、王子もたいそうおどろきになって、

「それは霜（しも）というもので――霜と言う声を聞くと燕は葦（あし）の言った事を思い出してぎょっとしました。葦はなんと言ったか覚えていますか――冬の来た証拠（しょうこ）だ、まあ自分とした事が自分の事にばかり取りまぎれていておまえの事を思わなかったのはじつに不埒（ふらち）であった。長々御世話になってありがたかったがもう私もこの世には用のないからだになったからナイルの方に一日も早く帰ってくれ。かれこれするうちに冬になるとてもおまえの生命は続かないから」

としみじみおっしゃいました。燕はなんでいまさら王子をふりすてて行かれましょう。たとえこごえ死にに死にはするともここ一足（ひとあし）も動きませんと殊勝（しゅしょう）な事を申しましたが、王子は、

「そんなわからずやを言うものではない。おまえが今年（ことし）死ねばおまえと私の会えるのは今年限り。今日ナイルに帰ってまた来年おいで。そうすれば来年またここで会えるから」

と事をわけて言い聞かせてくださいました。燕はそれもそうだ、

「そんなら王子様来年またお会い申しますから御無事

でいらっしゃいまし。お目が御不自由で私のいないために、なおさらの御不自由でしょうが、来年はきっとたくさんのお話を持って参りますから」
と燕は泣く泣く南の方へと朝晴れの空を急ぎました。このまめまめしい心よしの友だちがあたたかい南国へ羽をのして行くすがたのなごりも王子は見る事もおできなさらず、おいたわしいお首（つむり）をお下げなすったたままうすら寒い風の中にひとり立っておいででした。

　さてそのうちに日もたって冬はようやく寒くなり雪だるまのできる雪がちらちらとふりだしますと、もうクリスマスには間もありません。欲張りもけちんぼう

も年寄りも病人もこのころばかりは晴れ晴れとなって子どものようになりますので、かしげがちの首もまっすぐに、下向きがちの顔も空を見るようになるのがこのごろです。で、往来の人は長々見わすれていた黄金の王子はどうしていられる事かとふりあおぎますと、おどろくまい事かすき通るほど光ってござった王子はまるで癩病（らいびょう）やみのように真黒（まっくろ）で、目は両方ともひたとつぶれてござらっしゃります。

「なんだこのぶざまは、町のまん中にこんなものは置いて置けやしない」

と一人が申しますと、

「ほんとうだ、クリスマス前にこわしてしまおうじゃないか」

と一人がほざきます。

「生きてるうちにこの王子は悪い事をしたにちがいない。それだからこそ死んだあとでこのざまになるんだ」とまた一人がさけびます。

「こわせこわせ」

「たたきこわせたたきこわせ」

という声がやがてあちらからもこちらからも起こって、しまいには一人が石をなげますと一人はかわらをぶつける。とうとう一かたまりのわかい者がなわとは

しごを持って来てなわを王子の頸にかけるとみんなで寄ってたかってえいえい引っぱったものですから、さしもに堅固（けんご）な王子の立像も無惨（むざん）な事には礎（いしずえ）をはなれてころび落ちてしまいました。

ほんとうにかわいそうな御最期（ごさいご）です。

かくて王子のからだは一か月ほど地の上に横になってありましたが、町の人々は相談してああして置いてもなんの役にもたたないからというのでそれをとかして一つの鐘（かね）を造ってお寺の二階に収める事にしました。

その次の年あの燕がはるばるナイルから来て王子をたずねまわりましたけれども影（かげ）も形もありませんかっ

た。

しかし今でもこの町に行く人があれば春でも夏でも秋でも冬でもちょうど日がくれて仕事が済む時、灯(ともし)がついて夕炊(ゆうげ)のけむりが家々から立ち上る時、すべてのものが楽しく休むその時にお寺の高い塔(とう)の上から澄(す)んだすずしい鐘の音が聞こえて鬼(おに)であれ魔(ま)であれ、悪い者は一刻(いっこく)もこの楽しい町にいたたまれないようにひびきわたるそうであります。めでたしめでたし。

底本：「一房の葡萄」角川文庫、角川書店
１９５２（昭和27）年３月10日初版発行
１９６７（昭和42）年５月30日39版発行
１９８７（昭和62）年11月10日改版32版発行
初出：「婦人の国」１９２６（大正15）年４月
入力：土屋隆
校正：鈴木厚司
２００３年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。